慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Maloryの 'Tale of Gareth' : その構造・ 意味・ 性格描写
Sub Title	Structure, meaning, and characterization in Malory's 'Tale of Gareth'
Author	高宮, 利行(Takamiya, Toshiyuki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1975
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.34, (1975. 2) ,p.113(14)- 126(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00340001-0126

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Malory の 'Tale of Gareth'

——その構造・意味・性格描写——

高　宮　利　行

I

Sir Thomas Malory の *Le Morte Darthur* のうち，Eugène Vinaver 編集の第四の物語 (Caxton 版第七巻) 'The Tale of Sir Gareth of Orkney That was Called Bewmaynes'[1] (以下 'Tale of Gareth' と略称する) に関しては，作者が直接典拠とした作品がまだ発見されていない[2]。この物語の主人公 Gareth は，Arthur 王宮廷の悲劇に直接には関与していない。しかし，Gareth の不慮の死は，悲劇の元凶となった Lancelot と Gawain の確執を生み出す原因となった。Lancelot が愛する王妃 Guinevere を火刑台から救い出そうとして，誤って無防備の Gareth を斬殺してしまい，弟思いの Gawain の Lancelot に対する復讐心を異常な程に煽りたてる結果となったのである。Lancelot と Gareth, Gawain と Gareth, この各々の関係は，*Morte Darthur* の終末で明瞭な形をとって表面にあらわれる[3]。だがその端緒はこの 'Tale of Gareth' の中に既に示されている。この点で Malory は，後の catastrophe をより効果的に準備するために，'Tale of Gareth' の source を縦横に駆使しながら，作者自身の意図を盛り込み，Gareth の characterization に成功している。

Morte Darthur 全体の枠組の中に占める 'Tale of Gareth' の位置，あるいは Gareth の果す役割については，Wilfred L. Guerin 等の論文があり，詳しくはそれらに譲ることにして，拙稿では 'Tale of Gareth' に限定して，その構造と意味，及び Gareth の性格付けに関する Malory の意図を探ろうとするものである[4]。

'Tale of Gareth' は従来，Malory の他の tales に比較して，まとまりのある構造をもつ，いわゆる self-contained narrative として高い評価を受けてきた。Margaret Schlauch のように，この作品に，近代的な realism の手法による fiction の，先駆的な作品のひとつとしての価値を認める学者もいる[5]。なお，'Tale of Gareth' は *Le Bel Inconnu* (c. 1190), *Wigalois* (c. 1210), *Lybeaus Desconus* (c. 1350), *Carduino* (c. 1375) と並んで，中世に広く分布した 'The Fair Unknown' group のひとつで，制作時期としては最も新しい作品である。この物語の筋はあらまし次のようなものである。

Arthur 王が宮廷で聖霊降臨節を祝っていると，若者がひとり素性を隠して，粗末な格好で現われ，王に対して三つの要求を掲げる。最初の要求が容れられて，若者は司厨長の Kay に Beaumains などと口汚なくののしられながらも，宮廷の皿洗いとして卑しい生活に甘んじる。ただ Arthur, Lancelot, Gawain からは寵愛を受ける。そして一年後，若者は，暴君に城を包囲された貴婦人を助けようとして，第二の要求どおり，冒険が許される。彼は案内の乙女 Lyonet とともに宮廷を出立するが，まもなく，後を追ってきた Kay と戦い，屈服させる。続いて Lancelot と戦って引き分けにもちこんだ若者は，三番目の願いが叶えられて，Lancelot によって騎士の位を与えられる。その後，若者は数々の冒険を経て，黒・緑・赤などの名のついた騎士達と戦って，彼等を皆降伏させる。また案内役の Lyonet の軽蔑の言葉にも耐えしのぶが，依然として自らの素性を明らかにしないまま，遂には城の貴婦人 Lyones を救出する。

ここで若者はようやく，自分が Gawain の弟で，Gareth of Orkney である旨を告げる。救い出した Lyones と Gareth との間には，愛情が急速に芽生える。その後，数々の試練を受けた Gareth は，偶然にも長兄 Gawain と戦って引き分け，Arthur 王宮廷において，Lancelot に次ぐ気高い騎士としての評価を受ける。Gareth と Lyones は Arthur 王のもとで結ばれて，盛大な結婚式が挙行され，それを祝う華麗な槍試合で，物語は happy ending を逐げる。

以上のように，物語の前半は Lyones 救出の場面で，後半は Gareth と Lyones の結婚で climax を迎えるが，構造としては，きわめて symmetric に作られている。すなわちこの物語は Arthur 王宮廷における聖霊降臨節の宴ではじまり，Arthur 王宮廷における結婚式の祝宴で終る。最初の Gareth の三つの要求と対照的に，終りでは三日間に亘る tournament がある。また，Gareth は戦いの続く長い試練の旅のはじめに Lancelot と引き分け，終りに Lancelot と並ぶ勇者 Gawain と引き分ける等々，全ての事件はこういった symmetry によって統一されている。

II

'Tale of Gareth' では，主人公 Gareth は常に，Lancelot, Gawain, Tristram, Lamorak といった，円卓騎士団の中でもひときわ武勇の誉れ高い騎士達と対比されている。例を Lyonet の Gareth への会話の中からとりだしてみる。

> For and thou were as wyght as sir Launcelot, sir Trystrams or the good knyght sir Lamerok, thou shalt not passe a pace here that is called the Pace Perelus.' (*Works*, 308. 18-21)[6]

この一連の騎士達に関する言及は随所にみられるが，Gareth とのかかわりあいは，それぞれの騎士によって異なっている。特に Lancelot 及び Gawain の，Gareth との関係には注目すべき点が多い。

Gareth と Lancelot は，ともに邪悪な騎士の言動を黙って見過ごすことのできない，正義感に燃えた騎士であり，一方女性に対しては常に礼節をもって接する。Lancelot は Gareth の中に自己の分身，*alter ego* を認めるかのように，ほとんど異常ともみえる親しさと愛情を注ぎ込む。しかも Gareth は Lancelot によって騎士の位を授けられている。しかしながら，Gareth は Lancelot と異なり，adultery には全く関与していない。この点では，Gareth は courtly lover ではなく，Charles Moorman も指摘するように virtuous lover といえよう。Moorman は，Malory が第三の 'Tale of Launcelot' において，Lancelot-Guinevere の後の不義密

通を暗示させるような兆候を示した後，それに続く‘Tale of Gareth’では，これと全く異なる次元の恋愛を取上げた点に着目して，次のようにいっている。

> This oft-repeated story is used by Malory as a commentary upon love and the behavior of lovers, the main purpose of which is to present a natural, untutored affection, very different from the artificial, conventionalized *l'amour courtois*.[7]

Lancelot と Guinevere の愛は Tristram と Isoude の愛と同じく，*amour courtois* から発した不実の愛である。これに対して Gareth と Lyones の愛は，真実の愛は結婚に結びつくという恋愛観に基づいている。この観念は，‘Tale of Gareth’の終末近くの場面で繰返され，はっきりと，‘husband’と‘wife’という単語が強調される。

> and there the kynge asked his nevew, sir Gareth, whether he wolde have this lady as peramour, other ellys to have hir to his wyff.
>
> ‘My lorde, wete you well that I love hir abovyn all ladyes lyvynge.’
>
> ‘Now, fayre lady,’ sayde kynge Arthure, ‘what sey ye?’
>
> ‘My moste noble kynge,’ seyde dame Lyonesse, ‘wete you well that my lorde, sir Gareth, ys to me more lever to have and welde as my husbonde than ony kyng other prynce that is crystyned; and if I may nat have hym, I promyse you I woll never have none. For, my lorde Arthure,’ seyde dame Lyonesse, ‘wete you well he is my fyrste love, and he shall be the laste; and yf ye woll suffir hym to have his wyll and fre choyse, I dare say he woll have me.’
>
> ‘That is trouthe,’ seyde sir Gareth, ‘and I have nat you and welde you as my wyff, there shall never lady nother jantyll-woman rejoyse me.’ (*Works*, 359. 24–360. 5)

これに続く結婚の場面について，Vinaver は従来のフランス語で書かれた Arthur 王物語群とは相容れない性格をもっているとして，Malory の

original composition の可能性を示唆している (*Works*, 1441) が，上述の場面なども作者自身による記述という可能性が強い。しかも，Middle English で書かれた作品の中には，この結婚と結びついた男女間の恋愛を歌い上げたものがみられる。例えば，Breton lay の *Sir Orfeo*, 'The Fair Unknown' group の *Lybeaus Desconus*, Chaucer の 'Franklin's Tale' などがある。

'Tale of Gareth' の中で，Gareth が Sir Persaunte と戦って彼を破り，慈悲を与えて命を許してやると，Persaunte が自分の娘を Gareth の寝室に送りこむ場面がある。この時の Gareth の科白は，一方で，'The Fair Maid of Astolat' の sub-division における Lancelot の Elaine への言葉 (*Works*, 1089. 21-23. French source にはこの言葉はない) を想起させ，他方，*Sir Gawain and the Green Knight* の誘惑の場面における光景を思わせるものである。

> 'God deffende me,' seyde he, 'than that ever I sholde defoyle you to do sir Persaunte suche a shame! Therefore I pray you, fayre damesell, aryse oute of this bedde, other ellys I woll.'
>
> 'Sir,' she seyde, 'I com nat hydir by myne owne wyll, but as I was commaunded.'
>
> 'Alas!' seyde sir Bewmaynes, 'I were a shamefull knyght and I wolde do youre fadir ony dysworshyp.' (*Works*, 315. 9-16)[8]

Larry D. Benson は，'Tale of Gareth' の中に *Sir Gawain and the Green Knight* や他の ME の romances を連想させる点が多いことから，この作品を Malory の 'most "English" romance' とみている[9]。また，この物語には Sir Ironside, すなわち Red Knight of the Red Lands というかなり重要な騎士が登場するが，Auvo Kurvinen や R. M. Wilson は，Sir Ironside を主人公とした lost English romance が存在した可能性を示しており，'Tale of Gareth' についても，その source として，ME の作品があったのではないかとも考えられる[10]。

さて，'Tale of Gareth' の全篇を通じて，Gareth の virtuous lover

としての経歴に汚点を残すような事件が，ひとつではあるが存在する。Gareth と Lyones は燃えさかる情熱を遂げようとして，夜中に床をともにしようと試みる。しかし二度にわたるこの試みは Lyonet に邪魔されて果せない。この Gareth の行動を，Wilfred L. Guerin は，二人が以前に愛の誓いを交わしていたとして弁護している[11]。しかし，この事件はむしろ，Gareth の人間らしい弱さによって起ったととるべきではなかろうか。なぜなら，Gareth の恋人 Lyones は，超自然的人物と考えられる理由をいくつか挙げることができるからである。

Malory は *Morte Darthur* を書くにあたって，Arthurian romances に顕著にみられる超自然的要素をできるだけ除去しようと努めているが，'Tale of Gareth' にはこの要素がかなり強く感じられる部分がある[12]。この物語に登場する Lyones, Lyonet, Morgause の三人の女性は，究極的には源を同じくする超自然的人物から派生した分身であると推測できる。Geoffrey of Monmouth の *Vita Merlini* (c. 1148) に初めてその名があらわれ，その後書かれた多くの Arthurian romances で重要な役割を担う Morgain la Fée (*Morte Darthur* では Morgan le Fay) がそのもとの人物であったと考えられるのである。Gareth と Lyones が短時間に激しい愛におちるのは，やはり Morgain la Fée のもつ超自然的禀質のひとつのあらわれとみることができよう。生身の人間である Gareth が，超自然的な存在である Lyones と最後の一線を踏み越えようとしたとしても，決して彼の汚点とはならない。しかし，この事件のために，彼は Lancelot 同様，現世的な意味での最高の騎士，いわゆる earthly perfect knight ということになり，spiritual knight でないがゆえに，Gareth も Holy Grail に接する資格が与えられないのである。

再び，Gareth を中心とする Arthur 王宮廷の人間関係に目を向けると，Arthur 王は，物語の最初から，Gareth に変らぬ親愛の情を示し，粗野な態度で願いごとをする Gareth に対しても，'My fair son' と呼びかけている。Lancelot と Gawain は相競うようにして Gareth に親切を施すが，その根拠が互いに異なることを Malory は強調し，Gawain との血縁的な

関係よりも，Lancelot と Gareth との結びつきをより高めようと意図しているのは，例えば次の文からも窺われる。

> But as towchyng sir Gawayne, he had reson to proffer hym lodgyng, mete, and drynke, for that proffer com of his bloode, for he was nere kyn to hym than he wyste off; but that sir Launcelot ded was of his grete jantylnesse and curtesy. (*Works*, 295. 31-35)

Lancelot のもつ，'grete jantylnesse and curtesy' という美徳は，Gareth の 'meke and mylde' (*Works*, 296. 2) という性格と対比されよう。この 'meke and mylde' という set phrase は *Morte Darthur* 中ではもう一度，'The Fair Maid of Astolat' の episode にあらわれるが，そこでも Lancelot 自身の言葉によって Gareth に与えられている (*Works*, 1088. 34-1089. 3)。この部分は source の *La Mort le Roi Artu* にはなく，Malory の addition と考えられる。それ程 Malory は，Gareth の characterization には意を用いているのである。

Gareth が望みどおりに Lancelot の手によって騎士にしてもらうと，二人の関係は，騎士道の掟によってより強固となる。その結果，Camelot 崩壊の主因にまで深く関連していく。Lancelot と Guinevere の adultery に対して Gareth は批判的であった。また Gawain の Lancelot への復讐心によって，*dénouement* は加速度的に進行するが，この執念深い Gawain の復讐心を Gareth がひどく嫌っていた事実は，'Tale of Gareth' の中に既に認めることができる。

> For evir aftir sir Gareth had aspyed sir Gawaynes conducions, he wythdrewe hymself fro his brother sir Gawaynes felyshyp, for he was evir vengeable, and where he hated he wolde be avenged with murther: and that hated sir Gareth. (*Works*, 360. 32-36)

III

次にこの物語の中で Malory が扱っている 'gentilesse' について考え

てみる。'The Wife of Bath's Tale' の中で Chaucer が *sententia* として示したのは，真の高貴さ 'gentilesse' とは，生れつきの家柄血統や財産によるものではなく，高貴な行為をする者が高貴なのだという議論であった[13]。ところが一方，Malory は，高貴さと優れた武勇は，生来の正しい血統に付随する車の両輪だと主張しているように思われる。いいかえれば，高貴な血統を有する者は，必らず武勇や礼節の点でも勝れていることになる。

Gareth は King Lot of Orkney の第四嫡出子であり，Gawain の末弟でもある。よって Gareth は生れつき高貴なのである。しかし 'Tale of Gareth' では，この若者は自らの高貴な家柄を簡単には披瀝しない。自己の力が，数々の試練を通して，他人の眼前で証明された時はじめて，自分の素性を明らかにするのである。

Arthur 王の宮廷に予告なしに押しかけてきたみすぼらしい姿の Gareth をみて，Arthur, Gawain, Lancelot は，実は実貴な生れの若者ではないかと想像する[14]。彼等自身が由緒正しい出身であるため，他人の生れについても直観的に判断できるのであろう。Gareth が自己の identity を明らかにすべき相手は他にも大勢おり，彼が Arthur 王に三つの願い事をするのも，その目的のためである。すなわち，自らすすんで困難や試練の場に直面し，それらに打克つことによって，名実ともに優れた騎士であることを認めさせようという狙いで，これは Arthurian romances の常套手段のひとつといえよう。Gareth は第一の要求が受入れられて，一年間宮廷にとどまって，Beaumains などと Kay に馬鹿にされながらも勤めに励むが，'meke and mylde' な彼の virtue は Kay には通用せず，挙句の果ては戦いを挑まれて，力で自らを示す。

第二の願いとして与えられた冒険は，Gareth の武勇を発揮するよい機会となる。そしてこの冒険の旅の道案内に立つ Lyonet は，彼に対して繰返し試練を課す教師の役を果す。この点にも，Arthurian romances によく見受けられる 'education of the hero' という主題を読みとることができる[15]。

第三の願いはすぐ成就する。Gareth は Lancelot との戦いを引き分けに持ちこんだために，換言すれば，Gareth の武勇を十二分に発揮したからには，もはや素性を隠し続ける必要はない。Gareth の高貴な血統を知った Lancelot はひときわ満足し，喜んで Gareth を騎士に叙するのである。

> 'A, sir, I am more gladder of you than I was, for evir me thought ye sholde be of grete bloode, and that ye cam nat to the courte nother for mete nother drynke.' (*Works*, 299. 29-31)

Gareth が Lyonet とともに冒険を求めて続ける旅では，彼が前に立ちはだかる敵を倒すたびに，Lyonet から 'kychyn knave' とか，'fye uppon the' などとののしられる。Robert H. Wilson が指摘しているように[16]，'Tale of Gareth' では他の 'The Fair Unknown' group の物語とは異なり，乙女の主人公に対する侮蔑の言葉はかなり長い間続く[17]。Gareth はこれにじっと耐えしのび，その結果，Gareth の寛大さという徳の高い性格が浮び上ってくるのである。ここでも，乙女 Lyonet は 'education of the hero' の教師役を立派に果すことになる。Gareth は彼女に対して，ある時は，

> 'ye may sey what ye woll, but whomsomever I have ado withall, I trust to God to serve hym or I and he departe, and therefore I recke nat what ye sey, so that I may wynne your lady.' (*Works*, 302. 19-22)

といい，またある時は次のようにさえ答える。

> 'With all my wyll,' seyde he, 'I forgeff hit you, for ye dud nothyng but as ye sholde do, for all youre evyll wordys pleased me. (*Works*, 313. 15-17)

ここに至って初めて，武勇と寛大さは高貴さと合致する。そして，この後に続く場面では，高貴さが騎士としての Gareth の力を十分に発揮させるのである。Edmund Reiss はこれを paradox と呼んでいるが[18]，むしろこの部分は，Gareth を名実ともに第一級の円卓の騎士に仕立てあげるた

めの，必要不可欠な手続きと呼んで差支えないだろう。今迄手合わせをした騎士達の内で最強の Red Knight of the Red Lands と戦おうとする Gareth に対して，城の貴婦人 Lyones は，小人を介して次のような伝言を送る。

> Also pray hym [i. e. Gareth] that he be of good herte and corrage hymself, for he shall mete with a full noble knyght, but he is nother of curtesy, bounté, nother jantylnesse; for he attendyth unto nothyng but to murther, and that is the cause I can nat prayse hym nother love hym.' (*Works*, 318. 22–26)

ここで Red Knight は，確かに立派な騎士には違いないが，礼節と寛大さと高貴さを具えていないことが明瞭となる。一方 Gareth は，あらゆる徳の点で，完璧な騎士であることを自らの手で証明してしてきた。午前中には七人力の怪力を発揮するといわれる Red Knight を相手に，Gareth は乙女 Lyonet の制止をきこうとしない。

> ... and he were as good a knyght as ever was ony I shall never fayle hym in his moste myght, for other I woll wynne worshyp worshypfully othir dye knyghtly in the felde.' (*Works*, 321. 5–8)

この言葉からは Gareth の自覚と，潔癖な態度がよく汲みとれる。二人の戦いで，Gareth が悪戦苦闘の末勝利を収めるのは，結局，彼が Red Knight よりも高貴であったからに他ならない。戦いに敗れて恵みを乞う Red Knight に対して，justice の観点からは止どめの一撃を見舞うべきだと考える Gareth も，女性の依頼によってこのような乱暴な行動に出たという Red Knight を条件付きで許してしまう。ここには Gareth の女性に対する courtly manner が窺える。この点では，Gareth は長兄 Gawain と異なり，自己の行動を律するに充分な理性の持主である[19]。

Gareth はこれまで，何人かの相手に個人的には素性を明かしたが，いよいよ Arthur 王の前で，公けに identity を明らかにする計画を練る。彼は恋人 Lyones を Arthur 王のもとに派遣して，tournament を開催させる。そして自ら変装してこの槍試合に出場し，大活躍する。Gareth の

数々の勝利の後，伝令官が，彼の helmet にその名が刻みこまれているのを発見して，「彼こそ Sir Gareth of Orkney」と触れ回った時，Gareth の prowess と nobility は，Arthur 王宮廷で公式に認められたことになる。だが Gareth は，tournament の会場から素早く身を隠してしまう。彼にはもう一人，闘うことによって自己の武勇を証明すべき相手が残っている。長兄 Gawain である。Benson が指摘しているように，'The Fair Unknown' group では，主人公とそれにごく近い親族者によって，最後の戦いがおこなわれる[20]。この物語では，Gareth と Gawain が争っている時，Lyonet が止めに入って，二人の身元を告げて，引き分けに終らせる。ここでも Lyonet は教師の役目を努めている。Gareth は冒険の初めに Lancelot と引き分け，終りに Gawain と引き分けたことになる。こうして Gareth は武勇と高貴さという点において，この二人に互して決してひけをとらぬ，立派な円卓の騎士であることが証明されたのである。

IV

以上のことから，Malory が 'Tale of Gareth' を書くにあたって，二つの点を特に強調したことが理解できる。ひとつは，愛の結末は結婚だという，フランス的な *amour courtois* とははっきり異なる恋愛観を提示した点であり，もうひとつは，騎士の性格の中では，高貴な血統と武勇の誉れは常に比例して存在するという点である。Malory はこれらの *sententiae* を示すことによって，Gareth を Arthur 王宮廷における最高の騎士の一人に高め，後に重要な motif となる Lancelot と Gareth, Gawain と Gareth の関係を生み出している。Malory がこの点をはっきり自覚して物語を作っていることは，例えば，'Tale of Gareth' の中の次の言葉からも理解できる。

> Lorde, the grete chere that sir Launcelot made of sir Gareth and he of hym! For there was no knyght that sir Gareth loved so well as he dud sir Launcelot; and ever for the moste party he wolde ever be in sir Launcelottis company. (*Works*, 360. 28–31)[21]

Gareth が Arthurian romances の中で，これ程重要な騎士としての位置を占めるに至ったのは，それ以前の Arthurian romances を集大成したといってよい，この *Morte Darthur* に初まるだろう。フランス語の sources における Gareth に対応する人物は Gaheriez であるが[22]，Gaheriez という *cas-sujet* とその *cas-régime* の Gaheriet は，時として混乱して用いられている。しかし Malory は Gaheris と Gareth の二人の兄弟の spelling を混乱しないような形で用いている[23]。

Morte Darthur 中の Gareth は作者 Malory が最も愛着をもって描き出した騎士の一人である。この Gareth を，Malory は，ゲルマン的武士道の性格と，ロマンス的騎士道の性格の両方を少しずつ合わせもつ，いわばふたつの性格を部分的に折衷したきわめてユニークな騎士に作りあげている。これを Malory における Englishness と呼ぶことが，あるいは許されるかもしれない。Gareth は一方で，イギリスの伝統的な頭韻詩の流れを汲む prowess と loyalty の精神をもち，他方，romance に特有な love と *aventure* の要素を体現している。しかし Gareth は，一方で，*Nibelungenlied* をはじめとするゲルマン詩にみられる vengeance の思想には懐疑的な態度をとり，また他方，彼の恋愛はフランス的な *amour courtois* ではないことに注目せねばならない。しかも，女性に対して礼節をつくし，弱者に対して慈悲深いという点では，Gareth の行動は Arthur 王が定めた円卓騎士団の綱領に従っている。

> than the kynge stablysshed all the knyghtes and gaff them rychesse and londys; and charged them never to do outerage nothir mourthir, and allwayes to fle treson, and gyff mercy unto hym that askith mercy, uppon payne of forfiture [of their] worship and lordship of kynge Arthure for evirmore; and allwayes to do ladyes, damesels, and jantilwomen and wydowes [socour:] strengthe hem in hir ryghtes, and never to enforce them, uppon payne of dethe. Also, that no man take no batayles in a wrongefull quarell for no love ne for no worldis goodis. (*Works*, 120. 15-24)[24]

Malory の意図を図式化すれば，ゲルマン的な Gawain の性格とフランス的な Lancelot の性格を両極端とする直線の内部に，Gareth の性格を位置づけ，心情的には Lancelot に近い性格を与えたといえよう。Gareth は，Lancelot が最も愛した騎士であったのみならず，Malory の most beloved knight でもあったのである。

付記

本稿は，昭和 47 年7月 15 日の中世英文学談話会（於東京教育大）における口頭発表をもとに，加筆・修正を施したものである。

[Bibliographical Notes]

(1) E. Vinaver, ed., *The Works of Sir Thomas Malory*, 3 vols. (2nd ed. 1967; reprinted with corrections and additions, Oxford, 1973), pp. 289-363. テキストは現時点における最良の校訂版であるこの 1973 年版から引用する。*Works* と略称し，頁数・行数を並記する。

(2) 'Tale of Gareth' の source study については『芸文研究』第 32 号 (1973), 153-152 を参照されたい。

(3) Lancelot の手による Gareth 叙騎の場面，及び後に Lancelot らがこれに言及する場面は *Works*, 299. 19-32; 1110. 32-34; 1113. 4-6; 1114. 10-12; 1162. 28-29; 1189. 14; 1199. 11-28. Gawain が Gareth に対する愛情を示し，復讐心をあらわにする場面は *Works*, 1183. 27-31; 1184. 28-30; 1184. 34-1185. 3; 1185. 15-17; 1185. 21; 1186. 10-12; 1189. 12-14; 1191. 13-15; 1200. 15-17.

(4) この問題に触れた論文は R. H. Wilson, *Characterization in Malory: A Comparison with his Sources* (Private ed., Chicago, 1934), pp. 54-64; W. L. Guerin, '"The Tale of Gareth": The Chivalric Flowering,' *Malory's Originality* ed. R. M. Lumiansky (Baltimore, 1964), pp. 99-117; E. Reiss, *Sir Thomas Malory* (New York, 1966), pp. 100-110; L. D. Benson, '*Le Morte Darthur*,' *Critical Approaches to Six Major English Works* ed. R. M. Lumiansky and H. Baker (Philadelphia, 1968), pp. 81-131.

(5) M. Schlauch, *Antecedents of the English Novel 1400-1600* (Warsaw, 1963), pp. 75-76.

(6) さらに次を参照。*Works*, 316. 5-7; 316. 25-26; 319. 8-9; 362.27-363.5; 1088. 26-32.

(7) C. Moorman, *The Book of Kyng Arthur* (Lexington, 1965), p. 19.

(8) 'Tale of Gareth' と *Sir Gawain and the Green Knight* との類似点については *Works*, 1435-1436 参照。

(9) Benson, *op. cit.*, p. 130.

(10) A. Kurvinen, ed., *Sir Gawain and the Carl of Carlisle in Two Versions* (Helsinki, 1951), p. 109; R. M. Wilson, *The Lost Literature of Medieval England* (2nd ed. London, 1970), p.1 19: cf. R. W. Ackerman, 'Malory's Ironsyde,' *Research Studies*, XXXII (1964), 125-33.

(11) Guerin, *op. cit.*, p. 115n.

(12) 拙稿「Malory の 'Tale of Gareth'——その超自然的人物について」『芸文研究』第 32 号 (1973), 170-146 参照。

(13) F. N. Robinson, ed., *The Works of Geoffrey Chaucer* (2nd ed. London, 1957), Ⅲ (D) 1169-70.

(14) *Works*, 294. 18-21; 295. 11-12; 295. 28-30.

(15) M. P. Cosman はその著 *The Education of the Hero in Arthurian Romance* (Chapel Hill, 1965) において, Tristan, Perceval と Lancelot の *enfances* を取扱っているが, 'Tale of Gareth' への言及はない。

(16) R. H. Wilson, 'The "Fair Unknown" in Malory,' *PMLA*, LVIII (1943), 9.

(17) Lyonet の Gareth への悪口雑言は次の箇所にみられる。*Works*, 300. 7-14; 301. 11-15; 302. 12-18; 302. 28-31; 304. 26-31; 306. 16-17; 306. 26-28; 307. 13-14; 303. 11-13; 310. 16-18; 310. 31-33; 312. 5-6.

(18) Reiss, *op. cit.*, p. 104.

(19) これと対照的な Gawain の無慈悲で残酷な行為の例としては *Works*, 106. 17-25 にある。

(20) Benson, *op. cit.*, pp. 117-118,

(21) Gareth の Gawain に対する態度については *Works*, 360. 32-36 を参照。

(22) J. Frappier, ed., *La Mort le Roi Artu: roman du XIIIe siècle* (3rd ed. Genève, 1964), p. 291: cf J. D. Bruce, ed., *Le Morte Arthur: a Romance in Stanzas of Eight Lines*, (EETS, ES 88, 1903), p. 147.

(23) T. Kato, *A Concordance to the Works of Sir Thomas Malory* (Tokyo, 1974) によれば, 'Gareth' の spelling variants は, Garethe (2 例), genitive の形で Garethis (2 例), Gareths (1 例), Garethys (1 例) のみである。

(24) Vinaver もこの部分は Malory 自身の言葉だとしている。近年, この Arthur 王宮廷の chivalric code は, Malory の同時代人 John Hardyng の年代記の記述からとったとする説がある。E. D. Kennedy, 'Malory's Use of Hardyng's Chronicle,' *Notes and Queries*, new series, XVI (1969), 168-169.